

2024年3月24日前晩  
受難の主日（枝の主日）  
菊地功大司教 メッセージ

捕らえられたイエスを目の前にして問いかけるピラトに対して、集まった人々は「十字架につけろ」と盛んに激しく繰り返し叫んだと、福音の受難の朗読には記されています。

「十字架につけろ」。なんとわかりやすい短い叫びでしょう。その場に集まった人々は興奮していました。興奮した心に入り込み、それを捉えるのは、わかりやすく短いキャッチフレーズです。「十字架につける」という簡単明瞭な叫びは、瞬く間に人々の興奮した心を捉え、大きなうねりとなっていきました。

興奮状態の渦の中で、理性的な思考が顧みられることはありません。どんな理性的な言葉も興奮した人々を落ち着かせることはできないという現実直面したとき、ピラトは、抵抗することをやめてしまいます。大きな興奮のうねりに身を任せ、犯罪者を釈放し、神の子を十字架につけて殺すために手渡しました。

受難の主日には、二つの福音が朗読されます。最初に朗読されるのは、イエスを喜びの声を持ってエルサレムに迎えた群衆の姿が記されていました。その同じ群衆は、数日後に、イエスを賛美し喜んでエルサレムに迎え入れたことなど忘れ去って、「十字架につけろ」と叫びました。興奮の渦は、理性的な判断をかき消してしまいます。

「群衆」という存在は、自分自身の頭を使って責任を持って判断をすることを停止した人々です。目の前に展開する大きな波の興奮にただただ身を任せ、喜んでみたり悲しんでみたりと、流されるだけの存在です。なぜ自分がそう叫んでいるのか、その理由を考えることはありません。なぜなら手間のかかる面倒なことだからです。そこにひとりの人の、いのちがかかっていることに、気がつこうともしません。

その日、「十字架につけろ」と叫んでいる群衆一人ひとりに、仮にインタビューができたとしたら、どうでしょう。「イエスに死んでほしいなんて、そんなことは自分は思っても

いない」などという、無責任な返事がかえって来るのかも知れません。みんなの興奮に同調して叫んだ言葉への責任など、誰が感じるでしょう。

今の時代のコミュニケーションでは、時として、短い言葉の投げ合いになり、興奮状態の中で、理性的な判断が見過ごされてしまう事例を目の当たりにすることがあります。

時として、自分の感情を隠さずに直接表すような、短いけれども激しい言葉が飛び交っている様子を、ネット上に目撃することがあります。短い言葉のやりとりは、時として、無責任な言葉の投げつけあいに発展します。じっくりと考え練り上げた内容ではなくて、「十字架につけろ」と同じように、直感的にわかりやすく、興奮をもたらします。だから深く考えることもなく、送信してしまいます。

その言葉は、いのちを生かす言葉でしょうか。それとも、救い主を十字架につけて殺害したような、いのちを奪う言葉でしょうか。

聖週間が始まります。あの日のイエスの出来事にこの一週間心を馳せながら、自分はどこに立っているのか、何を叫んでいるのか、振り返ってみたいと思います。